View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

学習システム促進研究センター
『学習システム研究』第 4 号　2016(pp.43-54)

英語教師の教材研究力を育成する真正性研究の視座

－中学校英語教科書の改作過程の分析を通して－

五井　千穂・渡邉　勝仁・深澤　清治

本研究は，英語教育における教材の真正性（authenticity）のあり方について検討することにより，教師の教材研究力を涵養するための視座を明らかにすることを目的とする。第二言語習得研究において，できるだけ自然かつ多量の理解可能な目標言語入力にふれることは，必須の条件のひとつとされている。最新のＩＣＴや多様な教材ソフトウエアの開発により，学習者が自然な英語に接する機会は質量ともに格段に向上してきた。しかしながら，教材はできるだけ自然なものでなければならないとする主張に対して，自然な教材の教育的効果を疑問視する主張もあるなど，教材の自然さの有用性については今なお多くの議論がある。さらに，いったい何をもって自然さを定義するかも定まっていない。そこで本論では，英語教育における教師のための真正性の視座について，これまでのさまざまな研究者による定義を概観・整理するとともに，教科書教材の真正性に大きな影響を与えると考えられる教材改作（materials adaptation）過程について検討を行う。教材の真正性に関する理論的考察に加え，テキスト原素材から教科書題材に変化する過程の分析を通して，日本のような外国語としての英語教育環境で必要となる真正性の視座を新たに構築することをねらいとする。
キーワード：真正性，英語教科書，教材改作

A Viewpoint of Authenticity to Enhance Teacher's Abilities in Studying Teaching Materials:

Through an Analysis of the Adaptation Process of a Junior High School English Textbook

Chiho Goi, Katsuhito Watanabe and Seiji Fukazawa

The purpose of this article is to consider the meaning of authenticity of teaching materials in English language education, and consequently to clarify the viewpoints for developing teachers' abilities in studying teaching materials. In second language acquisition studies, it is regarded as essential to be exposed to abundant comprehensible input in the target language. With the advancement of ICT and a variety of educational software, second language learners have the great advantage of getting access to a lot of natural English language resources. Under the recent communicative trend, there is a strong belief that teaching materials must be as real as possible; however, there remains certain skepticism about the effectiveness of authentic materials in second language teaching. Furthermore, there is no unified definition of the term. Therefore, this article will

review the concepts of authenticity advanced by several applied linguistics researchers and examine efforts to maintain authenticity in textbook materials adaptation processes. By theoretical consideration of material authenticity and practical analysis of the simplifying process from the original to the adapted textbook material in a Japanese junior high school English textbook, this study will try to construct a viewpoint of authenticity necessitated in an English-as-a foreign-language situation like Japan.
Keywords：Authenticity, English Textbook, Materials Adaptation

１．問題の所在

外国語（第二言語）教育における教材の真正性に対する議論には長い歴史がある。19 世紀末の言語学者 Henry Sweet（1899）の著作 *The practical study of languages.* にも，教育用に仕立てられた人工的な教材よりも，自然な教材のほうが望ましいとする主張が見られる。

一般的に，真正性（authenticity）とは，新聞記事やニュース，歌詞などのように母語話者のために書かれた本物（real）の言語テキストの特性を表し，非母語話者を念頭に教育目的のために書かれたコースブック中の本文，対話，ドリルなどのように何らかの統制のもとで意図的に作成あるいは簡略化された言語テキストの特性とは区別して捉えられている。特に，1970 年代以降のコミュニケーション重視の外国語教育の流れの中で，非真正（inauthentic）教材は，言語使用のモデルとしても，リスニング・リーディングの教材としても不適当であるという思潮が高まり，教育用に普及している教材テキストの問題点を目標言語の母語話者の立場から批判する指摘は常に存在してきた。教材を使用する教師が母語話者である場合には，そのような指摘がさらに数多く見られる。

しかしながら，英語が国際的な言語としての地位を確立したのち，国際共通語（lingua franca）の立場のように，非母語話者による言語を到達目標として容認する動きが生まれている。言語テキストに対する英語母語話者による単一的な視点からの言語的な自然さ，即ち真正性のみを追求するだけでなく，近年，やや不自然なテキストであってもそれを使用した教師と学習者による教室内発話の自然さという特性に着目しようとする新たな視点が生まれてきた。言語テキストの真正性よりも，活動の真正性に注目することによって，次のような不自然な教室内対話は淘汰されていくという。

Teacher: Have I a nose on my face?
Student: Yes, you have.
Teacher: Good.
（Thornbury, 2006）

以下，本小論では，英語教育における真正性の定義を押さえた上で，真正性概念の推移をまとめ，さらに次章において，ある文学作品の原文テキストと，教科書用に書きかえられた改作テキストとを比較・検討し，特に非母語話者英語教師にとっての真正性という視座の重要性について考察する。

（１）英語教育における真正性とは

真正性（authenticity）という概念は，近年，言語学，文学，談話分析，語用論，社会言語学，第二言語習得，異文化コミュニケーション，比較文化，動機づけなど，多様な研究分野との関連の中で一段と複雑化してきている。その中で，外国語（第二言語）教育，とりわけ英語教育のコンテクストにおいての真正性の役割を考えるために，まずは概念規定を行う必要がある。Gilmore（2007）によれば，真正性は次のような８つの定義群に関連しているという。

1）母語話者が母語話者のために特定の言語コミュニティにおいて発した言語
2）実在する話し手・書き手が実在する聞き手に対して，実際に意図したメッセージを伝えるために発した言語
3）言語に含まれたメッセージよりも，その言語の受け手（聞き手・読み手）によってその言語に与えられた質
4）学習者と教師の間の相互作用であり，個人的なやりとりのプロセス
5）選択されたタスクのタイプ
6）教室内の社会的場面
7）評価
8）目標言語母語話者に認知されるため，目標

言語グループのように考え行動する能力
（Gilmore, 2007, p.98）

このように，本物らしさの定義は，言語テキストそのもの，使用者，社会文化的場面，コミュニケーションの目的，などによって決定することができる。これらをもとに，Gilmore は Morrow（1977）の次のような定義を採用している。

> An authentic text is a stretch of real language, produced by a real speaker or writer for a real audience and designed to convey a real message of some sort.
> （真正なテキストとは，実在する話し手や書き手が実在する聞き手・読み手のために発話し，ある種の真実のメッセージを伝えることをねらった，一連の本物の言語のことである。）
> （Morrow, 1977, p.13）

（２）自然な言語と教科書言語とのギャップ

Scollen & Bernsten（1988），Clavel-Arroitia & Fuster-Marquez（2014）をはじめ，教材テキストの対話は本物の対話からかけ離れており，いつも実際の本物の対話データを基盤とすべきであると主張する研究は数多く見られる。Scotton & Bernsten（1988）に指摘されたように，たとえば「道順を尋ねる」場合では多くのテキストにおいて，談話の流れは①道順を尋ねる，②道順を教える，③感謝する，という３つのプロセスで構成されているが，実際の会話にはもっと多くの発話の脱線があり，複雑であるという。そのため，教科書の例文に従って行った会話は，せいぜい丁寧すぎる，あるいは悪くすると奇妙に聞こえる（overly polite at best, or odd at worst）と評価されることがあるという。

それ故に，日本の学習指導要領のような国のガイドラインに従って計画的，制限的に導入することを条件とされた教材においては，いかに英語母語話者の判断に近づけていくが大きな課題となっている。

（３）第二言語教育における真正性概念の推移

真正性は教材テキストに存在するという考え方に対して，学習者が本物だと感じれば，真正性のある教材とする考え方もある。原材料テキストから加工したものであっても，教室場面において教師，学習者にとって使い勝手の良いものにする，さらにそれを本物と思わせるための過程は，教材改作（materials adaptation）と呼ばれる。教師も学習者も，教材は常にどこからか与えられる絶対的な存在と取らえることが多く，改作過程の存在や，その過程での変更プロセスはあまり大きな関心を払うことはない。しかしながら，教材改作を行っていない，書き下ろしの自然な英語テキストはほとんどないといってよい。そこで次章では，教材の真正性に対する２つの議論を概観した上で，ある原文テキストから簡略化テキストに至る実際の改作過程をたどってみることにする。

２．教材における真正性の捉え方

学校現場に限らず，言語学習の場面において，教師が真正性を意識して指導する意義は一般的に受け入れられているとみてよいだろう。しかし，真正性の定義が幾通りも提唱されていることが示すように，教材における真正性の捉え方も一方向に定まったものではない。本章では，教材における真正性に対して異なる視点を持つ２名の研究者の論文を概説，比較する。

（１）対象研究者および論文

1）Alex Gilmore:

Gilmore, A.（2004） A comparison of textbook and authentic interactions. *ELT Journal*, 58, pp.363-374

Gilmore は，スペイン，メキシコ，イギリスで外国語としての英語を指導した経験を持ち，現在は東京大学で教鞭をとっている。コミュニケーション能力，言語学習における真正性に関する論文を数多く発表してきた。また研究分野には，談話分析，教材開発，教室研究も含まれる。

2）Henry G. Widdowson:
Widdowson, H.G.（1996） Comment: authenticity and autonomy in ELT. *ELT Journal, 50*, pp.67-68.

Widdowson は，ロンドン大学名誉教授の地位にある他，これまでにイギリスの複数の大学で教鞭をとり，応用言語学や言語教育，特に英語教育の分野で貢献してきた。研究の中心は，談話分析，言語教師教育，文体論であり，数多くの論文，著書を発表している。

（２）各論文の概要と構成

1）Gilmore, A（2004） A comparison of textbook and authentic interactions

Gilmore は，教材の英語には，実際に使用されている英語が扱われたものであるべきだとの立場である。この論文は，教材の実態を把握するために，教科書（英米の大手出版社によるもの）の対話文を，現実のコミュニケーション場面での対話における談話の特徴と比較，分析し，考察をおこなったものである。

比較を可能にするために，対話文のジャンルに‘service encounter’が採用されている。面識のない２人の話者の対話で，一方がもう一方に情報を求めるという形態のものを指し（例：旅行客とツーリスト・インフォメーションの担当者との間でのやり取り），教科書に設けられている対話パターンを，教室外の実際の生活場面においても同じパターンで「複写する」ことが可能であるという利点がある。Gilmore は，自分が情報を求める立場の話者になり，自分の生活環境下，教科書に設定されているのと同様な場面において，進行をコントロールしながら実演した対話を記録した。これが，比較・分析に用いられた「現実のコミュニケーション場面での対話文」である。教材と現実の言語使用場面との談話の比較・分析から明らかになったことは，談話の特徴において，教材における対話と実際の言語使用における対話との間には大きな差があるということである。教材の対話には，実際の対話で現れる談話上の特徴のうちの多くが反映されておらず，Gilmore は，これは教材における課題と捉えている。ただし，上記の教科書よりも新しい教科書を調査してみると，談話特徴の反映率は全体的に上昇しており，真正性の点で「教科書は改善されてきている」とも述べている。

論文の構成は次のとおりである。

- Introduction
- The investigation
- Service encounters
- Results and discussion
  - The length of conversations
  - Lexical density
  - False starts and repetitions
  - Pauses
  - Terminal overlap and latching
  - Hesitation devices
  - Back-channels
- Are textbooks improving?
- Conclusion

2）Widdowson,H.G.（1996）Comment: authenticity and autonomy in ELT

Widdowson は，真正性を「英語話者が実際に使用する英語」であるという特徴，つまりテキストそのものの特徴としてではなく，教育的場面におけるテキストと学習者との関係を表す特徴として捉えている研究者である。学習者が適切に反応できる英語が真正な英語ということである。

Widdowson は，著書 *Teaching Language as Communication*（1978）以来，一貫して上記の視点で真正性を論じている。今回対象としたこの‘Comment’は，論文というよりも論説に近い性格であるものの，他の論文にも共通する，教育的コンテクストを意識するべき意義が端的にかつ凝縮して述べられている。英語指導に関わる２つの概念，authenticity（真正性）と autonomy（自律性）を軸に論じているものであるが，この文献の‘authenticity’という用語は，Widdowson の捉え方での真正性ではなく一般的通念によるもの，つまりその言語の母語話者が使用する場面をそのまま用いる意味で使用されている。「授業で提示される言語は，ネイティブ話者の実際の使用法を表すよう，できるだけ真正なものにするべきだ」という真正性の点と，「学習者はできるだけ自律的に，学習言語が自分のものにできるようになるべきである」という自律性の点から，指導の際に扱う英語のあり方が検討され，対照的な特徴が示されている（pp.67-68）。セクションに分けられた構成にはなっていない。

なお，Widdowson は，*Teaching Language as Communication* の中では，自身の捉えでの authenticity（真正性）と区別して，テキストそのものの特徴を表すための語としては，独自の用語 genuineness（真実性）を充てて論じている（p.80）。しかしここでは，‘Comment’という文章の性格上，自分自身の研究というよりは，外の研究世界に存在している論点を取り上げて検討する必要があり，対照的概念を示すのに独自の用語を用いて「真実性―真正性」とすることを避けたものと考えられる。しかし，この対象論文での authenticity は，Widdowson の用語での真実性に相当し，autonomy は真正性の基盤に相当するものであると判断される。

（３）両論文の比較・対照

教材とする英語の真正性の捉え方は，Gilmore と Widdowson で対照的である。前セクションでも触れたとおり，Gilmore が，教材はネイティブ話者が通常の社会生活の場面で実際に使用しているような英語を扱うべきであるとしているのに対し，Widdowson は，英語学習者（非ネイティブ話者）の学習過程で学習者の使用に適するように英語を扱うべきであると主張し，Gilmore のような視点での authenticity を重視した教材観，指導観の弊害を指摘している。両論文を通して表されている，対照的な二人の研究者の捉え方を整理すると，表１のようになる。

両者の捉え方の違いは，根本的に，英語学習の到達目標に重点を置いているか，学習の過程に重点を置いているかの違いから生じているように思われる。二人のそれぞれの主張に沿った教材について，お互いに相手のものに対して理解を示す姿勢は，いくらか述べられている。例えば Gilmore は，対話文であっても，教科書では特定の文法項目や語彙，言語の機能といった学習の要点を含んだものにする傾向があるために，実際の使用に見られる言語の特徴を全て反映しているとは限らないことに言及している（p.366）。しかし，それでも Gilmore が強調したいのは，教室外の世界で社会生活を送ることができるだけの英語力を涵養することであり，そのためには実際の使用場面を反映した authentic である英語を授業で扱うべきだ，という結論に至るのである。

一方，Widdowson の捉え方は，学習者の自律的態度を涵養する観点と結びついたものである。Widdowson は，Gilmore のような捉え方での authenticity のことは「適切な（appropriate）英語」という，言語自体のもつ絶対的特徴を追求するものとして定義しているのに対して，Widdowson 自身の捉え方に該当する自律性に焦点を当てた概念のことは，学習過程で「自

表１　教室で扱われるべき英語の捉え方

Gilmore の主張： ネイティブ話者が通常の社会生活の場面（＝教室外）で母語として使用する英語を授業で扱うべきである。	Widdowson の主張： 非ネイティブ話者である学習者のコミュニティや経験等を踏まえ、教室内で設けられる場面に適した英語を授業で扱うべきである。
学習の到達目標を第一に考える。	学習の過程を第一に考える。
言語使用の場面において適切とされる言語に重点がおかれる。	言語学習の場面で（学習者が）自分のものにできる言語に重点がおかれる。
ネイティブ話者の影響力を受ける。	非ネイティブ話者の影響力を受ける。
authentic でない教材、つまり、作られた・作り変えられた英文は不自然な英語であり、学習者が英語を教室外で第二言語として使用できることを目指すには不十分である。	authentic な教材は、ネイティブ話者にとっては現実的な場面を表すものであっても、非ネイティブの学習者にとっては非現実的なものである傾向にある。

※筆者作成。

分のものにする（appropriate）ことができる英語」，換言すれば，学習者が理解して使用することができる英語という，言語使用上での特徴を追求するものと表現している（p.67）。

３．日本の教科書におけるテキストの実際

前章で真正性については，到達目標に重点を置く Gilmore の捉え方と，学習の過程に重点を置く Widdowson の捉え方があることを確認した。日本の中学校，高等学校の指導現場で使用されている教材（検定教科書）に適用されているのは，Widdowson の捉え方といえるであろう。高等学校の教科書で，テキストの難度が高いものの中には，ネイティブが書いた文章を引用した‘authentic’という性質のものがあるかもしれないが，多くの場合，原典から大幅に書き換えた改作がなされたものであるか，教科書執筆者による書き下ろしのテキストになっている。検定教科書は学習指導要領に基づいて執筆・編集されるものであることを考慮すれば，完全に‘authentic’というテキストの存在は考えにくい。

したがって，以下このセクションでは，Widdowson の用語での真正性を用いて，英語テキストの真正性を検討することとする。この真正性は，学習者とテキストの英語との関係における概念であることから，学習者が「このテキストは真正である」と認めるものが，真正なテキストということになる。教師は，いかにして生徒に真正性を見出させられるかを意識して指導を行うことが必要になる。そのためにはまず，教科書のテキストは実際どのようなものになっているのか―どのように改作されているのか―を把握することから始めるのがよいであろう。

（１）対象テキスト

以下の中学校３年生の教科書本文を一例として取り上げ，分析をおこなった。

教科書名：*SUNSHINE ENGLISH COURSE 3*（開隆堂）
テキスト：Program 10（pp.106-110）*After Twenty Years*（多読用の課）より，本文最初の 105 語（課の総語数 397 語）の英文

（２）分析方法

対象部分の英文を原文（原作 O. Henry）の該当部分と比較し，英文改作の方法とされる「追加・削除・修正変更・単純化・再配置」の観点から検討した。また，原文を改作する主な理由に，学習者の言語能力に合うように簡単な英文にすることがあることから，テキストの読みやすさの指数を算出した。

（３）結果と考察

表２はテキストの読みやすさの変化を示したものである。まず，英語の量という物理的負担が大幅に軽減されている。また，Flesh Reading Ease や Flesch-Kincaid Grade Level は，１文あたりの語数や１語あたりの語の長さを基に読みやすさを算出する指数であるが，こちらの数値もテキストが易しくされたことを表している。この難易度であれば，中学校３年生が理解し使用できる英語であると判断され，真正性を保証する要因の１つになる。

表２は，具体的に原文のどの部分が，教科書の各文に該当するのかを示したものである。原文のうち，教科書本文に使用されている情報部を網掛けで示してある。まず，テキストの総語数が７分の１近くまで減らされ，大幅な削除や単純化がなされていることに気付く。削除されている情報の多くは，詳しい状況説明で，パラグラフ単位で削除されている場合もある。また，教科書⑦（以下，数字は表３の教科書各文の番号を指す）の場合，原文では詳細に特徴が描かれている男の顔は‘his face’と単純化されている。さらに⑧，⑨では，パラグラフ全体で描かれている場面を，２文にまとめている。単純化ともいえるが，内容の集約ともいえるだろう。一方，情報が追加された変更箇所もある。原文の冒頭の文に場面説明はないが，①ではそれがなされている。‘a cold night in New York City’は，原文ではもっと後の位置で読み取れる情報であるが，情報の再配列がなされ，冒頭部に追加された形になっている。この変更により，読み手は少ない情報でも話の展開を把握しやすくなると考えられる。学習者の理解を助けられるよう修正が加えられた例である。

このように，この教科書テキストの改作では原文からの大幅な変更がなされており，それが原因で学習者が読み取れるものが除去され，真正性が失われるという懸念が生じるかもしれない。確かに，原文を読解できる力がある読み手であれば，その巧みな英語表現から，情景の詳細や登場人物の心情，話の展開の伏線などを深く読み解くことが可能であろう。しかし，全体的に単純化されたこの改作テキストも，同様な可能性は保持している。例えば，①，②の文の「寒い夜」に「暗い通り」を行く「警察官」が，人の姿を見つけて「近づいていく」行動をとったという情報から，人がいることに違和感を感じる状況，つまりこの登場人物２人の周りに人影がない場面を想像できる。改作されたテキストには単純化の特徴が多く見られるが，単純になった表現には情報が集約されている可能性も大いにある。そのような点を読解できれば，学習者（この英文の場合は中学３年生）が理解・活用できる英語でテキスト理解を深めることができ，真正性が生み出されるものと考えられる。

表２　*After Twenty Years* の原文・改作テキストの読みやすさ比較

	原　文	*SUNSHINE*
総語数	719	105
総文数	55	14
１文あたりの語数	13.0	7.5
Flesh Reading Ease	84.0	92.0
Flesch-Kincaid Grade Level	4.6	2.2

※筆者作成。

表３　*After Twenty Years* のテキスト改作例

原　文	*SUNSHINE ENGLISH COURSE 3*
The policeman on the beat moved up the avenue impressively. The impressiveness was habitual and not for show, for spectators were few. The time was barely 10 o'clock at night, but chilly gusts of wind with a taste of rain in them had well nigh depeopled the streets. Trying doors as he went, twirling his club with many intricate and artful movements, turning now and then to cast his watchful eye adown the pacific thoroughfare, the officer, with his stalwart form and slight swagger, made a fine picture of a guardian of the peace. The vicinity was one that kept early hours. Now and then you might see the lights of a cigar store or of an all-night lunch counter; but the majority of the doors belonged to business places that had long since been closed.	①On a cold night in New York City, a policeman was walking along a dark street.
When about midway of a certain block the policeman suddenly slowed his walk. In the doorway of a darkened hardware store a man leaned, with an unlighted cigar in his mouth. As the policeman walked up to him the man spoke up quickly.	②He saw a man near the door of a store and walked up to him.
"It's all right, officer," he said, reassuringly. "I'm just waiting for a friend. It's an appointment made twenty years ago. Sounds a little funny to you, doesn't it? Well, I'll explain if you'd like to make certain it's all straight. About that long ago there used to be a restaurant where this store stands – 'Big Joe' Brady's restaurant." "Until five years ago," said the policeman. "It was torn down then."	③"It's all right, officer," the man said. "④ I'm just waiting for a friend. ⑤ Twenty years ago we promised to meet here again tonight."
The man in the doorway struck a match and lit his cigar. The light showed a pale, square-jawed face with keen eyes, and a little white scar near his right eyebrow. His scarfpin was a large diamond, oddly set.	⑥Then the man struck a match to smoke. ⑦ The light showed his face.
"Twenty years ago to-night," said the man, "I dined here at 'Big Joe' Brady's with Jimmy Wells, my best chum, and the finest chap in the world. He and I were raised here in New York, just like two brothers, together. I was eighteen and Jimmy was twenty. The next morning I was to start for the West to make my fortune. You couldn't have dragged Jimmy out of New York; he thought it was the only place on earth. Well, we agreed that night that we would meet here again exactly twenty years from that date and time, no matter what our conditions might be or from what distance we	⑧He went on talking. "⑨We said goodbye here. ⑩I started for the West to make my fortune. ⑪I was eighteen."

might have to come. We figured that in twenty years each of us ought to have our destiny worked out and our fortunes made, whatever they were going to be.”	
“It sounds pretty interesting,” said the policeman. “Rather a long time between meets, though, it seems to me. Haven’t you heard from your friend since you left?”	⑫ “Very interesting!” said the policeman.
“Well, yes, for a time we corresponded,” said the other. “But after a year or two we lost track of each other. You see, the West is a pretty big proposition, and I kept hustling around over it pretty lively. But I know Jimmy will meet me here if he’s alive, for he always was the truest, stanchest old chap in the world. He’ll never forget. I came a thousand miles to stand in this door to-night, and it’s worth it if my old partner turns up.” The waiting man pulled out a handsome watch, the lids of it set with small diamonds.	
“Three minutes to ten,” he announced. “It was exactly ten o’clock when we parted here at the restaurant door.”	
“Did pretty well out West, didn’t you?” asked the policeman.	
“You bet! I hope Jimmy has done half as well. He was a kind of plodder, though, good fellow as he was. I’ve had to compete with some of the sharpest wits going to get my pile. A man gets in a groove in New York. It takes the West to put a razor-edge on him.”	
The policeman twirled his club and took a step or two.	
“I'll be on my way. Hope your friend comes around all right. Going to call time on him sharp?”	⑬ “I hope your friend will come around all right.”
“I should say not!” said the other. “I’ll give him half an hour at least. If Jimmy is alive on earth he’ll be here by that time. So long, officer.”	
“Good-night, sir,” said the policeman, passing on along his beat, trying doors as he went.	⑭ Then he went away.

※筆者作成。

４．結論

本論ではこれまで，英語教育における真正性に関して，その概念規定から視座の推移について考察を加えてきた。結論として，近年の言語研究，英語教育研究において，真正性は単に言語テキストの本物らしさによるだけでなく，教材に含まれる言語テキストが学習者にどのような影響を与えるのかも考慮していく必要を指摘した。以下では，現在そしてこれからの真正性の視座について，そのあるべき方向を指摘すると同時に，今後の課題について言及する。

第一に，真正性に対する必要意識や概念規定の研究はこれからも継続されるであろう。特にその際に有用な分野はコーパス研究である。コンピュータ技術の発達により，膨大な量的データをもとにした言語コーパス研究からの知見は，一人，あるいは少人数の英語母語話者の誤解や，直観的判断の揺れを是正して，より信頼できるデータを提供している。それはさまざまな言語記述データを基盤とすることから，言語教師の持つ規範的な言語知識を広げると同時に，それに挑戦する可能性も生み出している。

第二に，英語という言語の将来的，近未来的な位置づけを考えた場合，言語の規範性が揺るがされる可能性もある。国際共通語，国際補助語としての英語の観点から見た場合，教科書に対する英語母語話者からの容認性がより緩やかなものになることも考えられる。たとえば，音声や文法面における言語の地域変種などを，いわゆる「内円（inner circle）」にいる母語話者の英語と国際共通語としての英語をどのように位置づけていくのか，今後の課題となるであろう。

第三に，教育場面においての教材の観点から真正性を捉えた場合，特に外国語としての英語教育のように，教育政策による英語授業時間数や言語材料などのレベル別統制などによって，真に本物の教材を導入することが現実的に不可能な場合，たとえ原材料テキストから簡略化や修正を通したものであっても，準真正教材としての価値をどこまで認めていくのか，特に初級・中級レベルの英語教育においては喫緊の課題である。真正性は教材テキストの中に「ある」ものなのか，それとも教師や教材執筆者の手によって真正化する（authenticate）努力を通して「創られる，生まれる」ものなのか，英語教師にとっては重要な視座となるであろう。

参考文献

Buendgens-Kosten, J. (2014) Key concepts in ELT: Authenticity. *ELT Journal*, 68, pp.457-459.

Clavel-Arroitia & Fuster-Marquez (2014) The authenticity of real texts in advanced English language textbooks. *ELT Journal*, 68, pp.124-134

Davies, A. (1984) Simple, simplified, and simplification: What is authentic? In J. C. Alderson & A. H. Urquhart (Eds.), *Reading in a foreign language* (pp. 181-198), Longman.

Ellis, R. (2003) *Task-based language learning and teaching*, Oxford University Press.

Gilmore, A. (2004) A comparison of textbook and authentic interactions. *ELT Journal*, 58, pp.363-374.

Gilmore, A. (2007) Authentic materials and authenticity in foreign language learning. *Language Teaching*, 40, pp.97-118.

Morrow, K. (1977) Authentic texts and ESP. In S. Holden (Ed.), *English for specific purposes* (pp.13-17), Modern English Publications.

Scotton, C. M. & Bernsten, J. (1988) Natural conversations as a model for textbook dialogue. *Applied Linguistics*, 9, pp.372-384.

Siegel, A. (2014) What should we talk about? The authenticity of textbook topics. *ELT Journal*, 68, pp.363-375.

Sweet, H. (1899) *The practical study of languages: A guide for teachers and learners,* J. M. Dent & Sons Ltd/Oxford University Press.
Thornbury, S. (2006) *An A to Z of ELT,* Macmillan.
Widdowson, H. G. (1978) *Teaching language as communication,* Oxford University Press.
Widdowson, H. G. (1979) *Explorations in applied linguistics*, Oxford University Press.
Widdowson, H. G. (1996) Comment: Authenticity and autonomy in ELT. *ELT Journal*, 50, pp.67-68.
Widdowson, H. G. (1998) Contexts, community, and authentic language. *TESOL Quarterly*, 32, pp.705-716.

著者

五井 千穂　広島大学大学院教育学研究科博士課程前期
渡邉 勝仁　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
深澤 清治　広島大学大学院教育学研究科